荻野道雄先生のご退任に寄せて

経済学部長　川　畑　　壽

荻野道雄先生は、1987年に経済企画庁を退官、同年4月亜細亜大学経済学部教授に就任され、ちょうど20年後の2007年3月に定年を迎えられるとともに、名誉教授になられました。同年11月には、社会貢献が顕著であるところから、瑞宝双光章を受章されました。

日本の高度成長の時代に経済企画庁におられ、景気拡張が1965年11月から57か月も続いた「いざなぎ景気」を体験された先生にとって、1990年代のバブル崩壊後の経済停滞と、2002年2月から始まった今回の景気回復が「いざなぎ景気」を越えたとはいえ、経済成長もきわめて低調で、経済の盛衰にはとりわけ感慨深いものがおありのことと存じます。

亜細亜大学経済学部では、豊かなご経験に裏打ちされた日本経済論のご講義は、多くの学生に裨益いたしました。また、経済社会研究所所長として、長年に亘り研究所の運営に当たられ、文字どおり律儀に研究所年俸 Annals of Economic and Social Research を発行なさいましたが、ここにも荻野先生の実直なご性格が如実に現れておりました。所長としてただ名を添えるだけ、というのではまったくなく、たとえば2005年度のAnnalsでは、格差社会問題に鋭く切り込まれ、あるいは2006年度のAnnalsでは、世界経済に目配りされながら、日本経済の現況に論及しておられますが、アメリカ経済については「着実な成長」を期待しながらも、グリーンスパンが2006年のFRB議長退任の直前まで事態の重大さに気づいていなかったというアメリカにおける信用力の低い個人向け住宅融資であるサブプライムローンの問題について、「住宅投資にかなりの調整がみられた」と注意をすでに喚起しておられました。

先生のお仕事で、とりわけ感謝申し上げなければならないのは、内閣府も十分認識していたことですが、長年に亘る経済学特別講義「日本経済の現状と展望」の運営でありました。これによって多数の経済界の有力者に亜細亜大学の存在を知っていただけただけでなく、大勢の学生に日本経済の現状について、現場の貴重な生の声を聞いてもらうことができました。

2006年に荻野先生は、現在政府税制調査会長になっておられる香西泰先生をお招きになり、日本経済の現状と展望の講義をしていただきましたが、「今回の景気回復のきっかけは減収増益でした」というご指摘で始まるお話は大変な好評を博しました。香西先生は荻野先生の先輩にあたられる方で、お若いときは落語が趣味でおいでだったとのこと。趣味といえば、荻野先生の趣味は、カラオケでありました。歌唱力は玄人はだしで、森進一の「冬のリヴィエラ」など、秀逸でした。菅原洋一が歌う「今日でお別れ」のように、もう逢えない、というわけではありませんので、機会がありましたら、「雨の御堂筋」や「京都慕情」など、ベンチャーズ・サウンドのようなものも、お聞かせいただきたく存じます。これまでのご教導に深く感謝申し上げますとともに、先生のご健勝を心から祈念いたしております。